

タウンミーティング（行政懇談会）を開催しました

7月2日から7月30日までの間、各地区コミセンや、改善センター等において6回のほか、任意団体から開催要請のあった2回の計8回に渡り「タウンミーティング（行政懇談会）」を開催しました。今年度のタウンミーティングではテーマを「旧東川駅跡再開発プロジェクト」とさせていただき、現在の取り組みや今後の進め方の説明を行ったほか、テーマ以外のご質問などの事項も併せて、参加いただいた皆さんと町長が直接懇談を行いました。8会場合計で延べ208名の方にご参加いただき、ご参加いただいた町民の皆様、ありがとうございました。皆様からいただいた貴重なご意見などにつきましては、今後の町政に活かして参ります。

懇談会でのご意見等の要点を整理いたしましたので掲載させていただきます。また、ご意見の詳細につきましては、町ホームページにて公開していますので、併せてご参照ください。（<https://higashikawa-town.jp/portal/top/information/1309>）

※タウンミーティングで頂戴したご質問やご意見のうち、個別的な事項や、解決済みの事項については、掲載をしておりません。予めご了承ください。

旧東川駅跡再開発プロジェクトについて	
意見、質問等	町からの回答／今後の対応
○開発の方向性 ・ 静かな場所で暮らしたくて東川町へ来たが、町が整備されていいこともある一面、賑やかになり過ぎると静かな町ではなくなってしまう心配もある。 ・ 駅前再開発では観光に重点が置かれている印象があり、その観光軸の将来像が東川のまちづくりとどのように結びつくのか現時点では分かりにくい。現状の展望を可能な範囲で知りたい。	・ 経済を活性化させるには、一定の人口が不可欠であり、観光振興も含めた経済循環を保つことが町を守ることにつながります。もちろん、オーバーツーリズムへの懸念は理解しており、最初の構想段階からバランスを意識した検討が必要と考えます。 ・ 本プロジェクトの基本理念では、観光施設ではなく、町民が訪れたくなる大切な場所とすることが根幹に据えられています。観光客向けの整備が進められているように見えるとのご指摘もありますが、あくまで町民が交流し、誇りを持てる空間づくりが出発点です。ただし、運営の持続性を考慮する上では、観光や外部からの訪問者も必要であり、地元と外とのバランスを意識した整備が必要となります。
○事業のねらい ・ もとは織田コレクションを展示する美術館を整備する趣旨の事業であったと認識していますが、どのような経緯でプロジェクトの趣旨が変わったのか。	・ 「旧東川駅跡再開発プロジェクト」の構想の名称は町長就任後に具体化し、それ以前の「東川KAGUデザインミュージアム構想」には明確な計画や図面はありませんでした。織田コレクションの公有化を受けてその価値を活かすべきと判断し、レンガ倉庫の歴史的・産業的意義を踏まえるため、2年間の調査を行った結果として、「旧東川駅跡再開発プロジェクト」という総合的な名称を用い、その中で織田コレクションを活かすことを計画しています。
○集客に向けた方策 ・ 電車をコンセプトにした点が興味深い。どのような要素を集客要素と捉えているのか。 ・ 「適疎」が東川の魅力であるが、既存の施設やイベントで既に十分集客できているようにも感じる。本当にこれ以上集客することが大事なのでしょうか。どこまで集客を目標にされているのか。	・ 電車の展示についても、見せ方次第で大きなコンテンツになるとの助言を得ています。物販については、東川らしさに合致しないアイデアは却下すべきであり、家具・クラフト・農産物・スイーツなど、道の駅とのバランスを考えた展開を検討中です。 ・ 適疎という考え方を踏まえ、今的人口を維持していく環境をつくっていけば、持続可能な町として住んでいる方が豊かに暮らし続けられるのではと考えております。その中で、一定の経済活動、教育や福祉、人材、関係人口との交流などが必要と考えます。 現在、持続可能な町をつくるかどうかの瀬戸際にきており、旧東川駅跡の整備は、今後の町の方向性を示す大きな節目となります。この場所をどう活かすかが、町の魅力や住みやすさを含めた適疎な町になるとと考え、検討を進めています。

旧東川駅跡再開発プロジェクトについて

意見、質問等	町からの回答／今後の対応
<p>○教育との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトのねらいの教育の部分に“株主と東川ファンを対象とした”と記載されているが、町の子どもたちの教育は入らないイメージか。 ・東川高校や東川国際文化福祉専門学校と連携して、デザインをテーマにした学科を設ける案がある。こうした教育機関と連携しながら、将来の町づくりを進めていく中で、若い世代の活躍の場を増やすことが重要であると感じている。 ・子供だけでなく現在の参加者全員が学び合い、将来的にはその知識や経験を子供たちへ引き継ぐことができる場になることを期待している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町としては、子どもから高齢者まで、すべての世代の暮らしに寄り添った施設を目指しています。とりわけ教育に関しては、先日も意見をいただくなど、関心が高いことを十分に認識しています。 ・東川高校は町と連携しながら教育活動に取り組んでおり、東川国際文化福祉専門学校へと名称変更がなされた中で、高校の存続を考えると、例えば「デザイン」をテーマにした学科の設置などの案もあります。町の新たな施設や取り組みと連動させながら、町の将来を考えていきます。 ・学びをテーマにした多様な取り組みが進められており、町主催だけでなく民間主催のイベントや場づくりも活発に行われています。例えば、LIPフェスというイベントが開催され、高校生を主な対象としながらも、一般の方や親子での参加も歓迎される学びの機会となっています。旭川市からの参加も可能であり、教育委員会も関与しています。町としては、こうした学びの場を、まちづくりの重要な要素として位置付け、今後も積極的に展開していきます。
<p>○電車の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・郷土館にある電車を新しい場所に展示しようということもあると思うが、修繕等は考えているのか。そこに展示してあるのは、木工の力によって綺麗に内装されているという話もあるが、かなり傷んできているので、もし移設するのであれば修繕をして動けるような状態を持っていくことはできないのか。 ・単に電車を展示しておくだけでは集客が難しく、北海道でも客足が遠のく例が多い。古い車両で運行は難しい面もあるが、常に人を呼び込むためには電車を実際に動かすことはできないか。倉庫の端までなら50m程度の線路設置も可能ではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・電車を出すことを決定したわけではなく、あくまで一案として検討しています。仮に展示するにしても、修復が必要であり、電車を動かす（自走させる）ことは現実的には難しいと考えています。これは過去に運営していた電気軌道関係者からも、復元・可動化はほぼ不可能という見解を得ていて、タウンミーティングで住民から提案があったことも踏まえて、無理であろうということをお伝えしました。 ・旧東川駅跡に展示されている列車の取り扱いについては、老朽化だけでなく、道路を使っての移動が現実的でないこともあります。施設内で保存・展示する方向で検討しています。建物に収めたとしても、プラットホーム横に戻すことも選択肢の一つです。将来的には線路を敷き、旧駅跡地に列車が通っていた歴史を可視化できるような表現も必要と考えています。
<p>○展示機能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・触れられる、座れる椅子があったら楽しいのではないか。 ・織田コレクションは「座ったら怒られるコレクション」として不評ですが、何とか改善できないかと思います。 ・隈研吾事務所による展示施設案について、町民や自身も具体的なイメージが湧きにくい。 <p>町として参考にしたり視察した、隈事務所の建築や展示があれば伺いたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・織田コレクションの椅子には実際に触れることができるものもありますが、中には高級外車並の価格がつくような希少で高価な品も含まれており、全てを自由に触れるようにするのは難しい面もあります。そのため、触れる・触れないの区別を工夫する必要があります。一方、「椅子に触れる体験」という観点では、必ずしも織田コレクションに限定せず、東川町で製造された家具など、地元産業と連携した展示と、織田コレクションの価値の両方を感じてもらい、販売振興や産業のPRや販売にもつながる場とすることが必要と考えています。 ・織田コレクションには「座れない椅子が多い」が、企画によっては座ることができるものもあります。ただし、一部には非常に高価な椅子も含まれており、破損などがあれば大きな問題となるため、扱いには慎重さが求められます。大切なのは、コレクションが持つ文化的・教育的価値をどのように活用し、町として活かしていくかを考えていくことだと思います。 ・現在は、東京・天王洲アイルにある「寺田倉庫」にも隈氏のプロダクトが展示・収蔵されていますが、全プロダクトではなく一部に限られており、隈氏からは「その展示品を必要に応じて活用して構わない」との話もいただいている。町としては、これを単なる隈建築として扱うのではなく、建築全般にわたるプロダクトとして考えています。

旧東川駅跡再開発プロジェクトについて

意見、質問等	町からの回答／今後の対応
○商業機能 ・農産物に特化した販売施設ができれば、より多くの出荷者が増える可能性が高いと考えている。農協の方針とは別に、多様な販売チャネルの存在が望ましい。今後の検討をお願いしたい。	・「まずは気軽に立ち寄れる直売所があれば、農産物も自然と集まり始めるのではないか」という前向きな意見もあります。また、旧レンガ倉庫跡地については、「農業を表現できる場」としての活用を望む声もあり、町としては、道の駅とのすみ分けや連携のあり方を含め、将来の方向性を丁寧に考えていく必要があります。現在は、ライスターミナルの完成も視野に入れながら、農協や観光協会など関係機関と、東川町らしい農業の魅力発信のあり方等について議論を始める段階です。
・駅跡再開発エリアが魅力的になるほど、人がそのエリアに集中し、「道草館」界隈の人流が減る懸念がある。既存施設「道草館」と新たな再開発エリアとの差別化をどう考えているのか。	・現在、中心となっている「道草館」や、交差点を挟んで位置する「せんとぴゅあ」など、東川町の市街地には既に多様な施設が点在しています。駅跡開発もしっかりとバランスをとって進めていければ1箇所に人が集中する心配もなくなり、各拠点が連携し合うことが東川らしく、まち全体としての魅力が高まるような開発を進めていくことが大切です。
・基本構想の「本プロジェクトにおいて実現すべきこと」の冒頭にある「経済的にも」という点について、収益が上がるビジネスモデルの構築をしっかり検討いただきたい。観光客や町外来訪者にどれだけ消費してもらえるかが重要であり、しっかりと仕組みを作つてほしい。	・人が集まる場所となることで経済的な収益は期待されますが、その一方で、周辺住民の暮らしへの影響にも配慮が必要です。ただ人を呼び込むだけではなく、地域全体の調和を図る視点を持って進めていくことが重要と考えています。今後も、懇談会などを通じてご意見を伺いながら、検討を進めてまいります。
○その他機能 ・石造建築の反響を活かし、「ドルビーアトモス」のような音響設備を整えて映画館として活用できないか。町内にホールがないことを残念に感じており、過去に札幌交響楽団を招いた際も小学校体育館を使用していた。ホール機能を備えた施設ができれば魅力的である。 ・役場主導か民間担当かを含め、使い方を検討しながら決めてることで、より魅力的な施設となるだろう。また、町内の様々な祭りやイベントの補完場所としての活用も期待される。例えば、消防の出初式の集合場所や、お神輿や音楽行進の最終地点など、人々が集まる象徴的な場所として機能すれば、町民がこの場所に親しみを持ち、共感できる場になると考える。	・頑丈なレンガ倉庫の利活用について、催し物などを開催できる多目的スペースとしての案が出されています。音響設備が整っており、催し物、講演会、芝居の観劇、高齢者グループによる発表会・練習の場としての活用を想定しています。発表的な利用に適した空間として、地域住民の活動を支える場所としての活用を見込んでいます。 ・東川町では、行政と民間が連携する「半官半民」の形を重視しています。町が主体的に関与しつつ、民間の手法や人材を取り入れることで、運営費の確保や柔軟な事業展開が可能となり、相乗効果を生んでいます。 また、地域の担い手が中心となる仕組みづくりが重要であり、町外の関係者に一任するのではなく、町内の人々が主体的に関わることが求められます。 町内イベントの拠点づくりにおいても、各団体が主導して行事を行う中で、新たな拠点が出発点・合流点となり、人が集まり、町のにぎわいや新たな動きが生まれる場となることが期待されています。
○施設の運営 ・運営体制の構築が難しいと感じている。可能であれば3月までに主体者を決定し、基本構想に盛り込むほうが、取組内容への反映がしやすい。 ・歴史やコレクションを解説する人材、学芸員的な役割を担う複数の人材が必要であり、民営だけで運営する場合も、一部は役場職員が対応し、学芸員を雇用する形が望ましいと考えている。	・この取り組みの主体となる人材や組織の方向性は現時点では未定であり、懇談会を通じて有識者の意見を踏まえながら検討が進められます。構想段階では、あくまで基本的な考え方を定め、その後の基本計画で具体化していく流れであり、主体者のあり方も含めて段階的に検討する必要があります。 ・デザインミュージアムについて、運営方法として町が直接学芸員を雇用する形も考えられます。公的・民間的な要素を組み合わせた柔軟な体制を考慮して行く必要があると考えます。これは一方に偏るのではなく、町の特性に合った仕組みを構築するという視点からの検討です。

旧東川駅跡再開発プロジェクトについて

意見、質問等	町からの回答／今後の対応
<p>○対話の方法・時期</p> <ul style="list-style-type: none"> ・駅跡に織田コレクションの美術館を単体で整備しても集客できないと感じていたため、現状の計画は結果としてはよい。 町民の視点からすると、町が何をしているのか、町長は何を考えているのかが見えにくく、疑念が生じる状況であった。情報の伝え方には改善が必要である。 ・3月に基本構想が固まった後、令和10年に着手するまでの間に、今回のようなタウンミーティングやワークショップの開催の予定はあるか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の構想に関する情報提供について、適切なタイミングや方法で十分な説明がなされていなかったことが、町民の皆さまの不安や誤解につながったと受け止めています。また、前町長の時代から構想の方向性は大きく変わっておらず、現在の構想もその考え方を継承するものです。 しかし、町としての説明のあり方において課題があったことは否めず、町長をはじめ、職員も含めてその点を反省しています。 今後は、町民の皆さまの理解と信頼を得られるよう、説明の仕方や情報発信のタイミングにも配慮しながら、丁寧に取り組んでまいります。 ・計画の進行に合わせた住民への周知については、模型やパース、平面図など手法は未定で、どの場面で示すかも検討中ですが、できる限り多くの住民の目に触れるよう努めていく方針で、良い方法があれば提案願います。
<p>○建築家とのかかわり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・田根氏や隈氏の名前が出ているが、建築家は既に決まっているのか。決定のタイミングや手順はどのように決まるのか。 ・駅跡再開発において、隈研吾事務所の展示施設案が取り入れられた経緯を知りたい。 ・これまでと違う建築の捉え方、隈研吾事務所との関わり方を検討されているのか、検討し得るものなのか伺いたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・現在、隈氏、田根氏へは「基本構想の検討」で依頼しています。過去に詳細設計は旭川の設計事業者が担い、隈氏はアドバイザーとして関わった経緯もありますが、現段階では決まっておりません。 ・町と隈研吾氏との関係は、コロナ禍における働き方や暮らし方の見直しを背景に、隈氏自らが町に連絡を寄せたことから始まりました。都会の働き方に限界を感じた隈氏は、自然環境の整った東川町に事務所を構えたいとの意向を示し、町は地元家具産業等との連携のもと、「KAGUの家」の設置や、若手デザイナーを対象としたKAGUコンペの開催、隈氏デザインの椅子のふるさと納税返礼品化、さらにデザインミュージアムの連携に取り組んできました。 ・隈研吾氏は本事業にも関わっていただいているが、世界的な建築家である隈氏に一方的な環境づくりを依頼したわけではなく、フラットな関係で協力したいというのが隈氏の思いで、建築意匠についてもボランティアに近い形で協力をいただいている。最初は隈氏に対して少し遠慮もあったが、このプロジェクトのスタート時点からは遠慮することなく意見交換を行っています。
<p>○事業の期待効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特に、世代を超えた価値あるコレクションの理解を深めるために、子どもや親子向けのワークショップなど教育機会を増やしてほしい。 ・東川町の施設が点在する特徴を活かし、歩いて楽しいストリートづくりを検討する必要がある。 ・ランドスケープだけでなく、人との交流も重要であり、諸先輩方の経験から学ぶことは多い。語り部的な年配者の知見を若い世代に伝える仕組みなど、年配者を活かして地域全体、さらには飲食店などを通じて東川全体に波及する形となることが望ましいと考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな取り組みを一つひとつ丁寧に進めながら、高齢者の居場所や子どもの遊び場づくりについても相談を重ね、より良い形を模索していきたいと考えています。 ・既存の住宅地の在り方も将来どのように変化するかは不透明で、町の将来像を柔軟に考慮しながら検討している段階です。 ・人口維持のためには、それぞれの地域に小学校を維持し、中心との関係性を考慮しながら、暮らしやすさや地域の魅力を創出し、暮らしと利便性を守るまちづくりが必要と考えます。

旧東川駅跡再開発プロジェクトについて

意見、質問等	町からの回答／今後の対応
○事業の財源 ・駅跡再開発には相当な開発資金がかかり、東川町がこの事業でどのように変化していくのかを注視している。補助金活用により町の直接的負担は少ないと聞くが、補助金も国民の財産であるため、有効かつ適切に使う必要がある。	・東川町では、まちづくりを進める際に国の補助制度を最大限活用してきました。国の「地方創生2.0」の方針に基づき、地域振興のために国の補助金を最大限に活用しています。補助金は税金ではあるものの、地域が主体的に活性化を図るための制度であり、町としては必要な事業を進める上で重要な財源と捉えています。国等の補助金と有利な起債（借入）を活用することで、実質的な町の負担は3分の1程度に抑えられます。その負担分についてもあらかじめ計画的に備える取り組みを進めており、事業の実施前後で約3～4年かけてふるさと納税などの基金を積み立て町の貯蓄などで計画的に準備しており、財政的にも見通しを持って事業に取り組んでいます
○駐車場 ・開発していく中で、観光客のレンタカー利用も鑑み、駐車スペースはかなり多く必要になると想定される。 ・ウォーカブルな環境を目指す構想がある中で、施設隣接の大規模駐車場は必要ないと考える。バリアフリー車両用や業者用など、最低限の駐車スペースは設けるべきだが、多数の車が出入りする駐車場整備は検討いただきたい。	・駐車場については、限られた土地の中で最大限の利便性の確保と、現実的な駐車スペースを確保するため、町内市街地において分散的に配置することを基本としています。今回示した案でも、空き地として活用可能な場所に、ある程度まとまった駐車スペースを設けることが可能であるという前提で配置を行いました。道の駅周辺についても、一部砂利を敷いて駐車スペースを増やすなどの対策を進めています。 ・駐車場の整備は一時的な対応にとどまらず、市街地の賑わいや来訪者数の変化に応じて、検討すべき課題と認識しています。施設の運営費を確保するためには一定の集客が不可欠ですが、集客と地域住民の暮らしやすさとのバランスが崩れないよう配慮する必要があると考えています。観光振興と生活環境の調和を図りながら、駐車場の在り方や施設整備の方向性についても、引き続き検討していきます。

公共交通について

意見、質問等	町からの回答／今後の対応
○乗合バスについて ・予約制乗り合いバスの増便については、役場の出発の場所と時間は決まっているのか。	・出発・到着の基準点として「道草館」を軸に時間設定を行っていますが、12時台から15時台については、小学校の下校時間を基に第1・第2・第3小学校からの出発を起点とし、児童生徒の下校を優先に対応します。一般の方もこの時間帯に予約利用可能です。
○乗合バスについて 乗合バスでは最終便が20時となっており、試験運行していた22時台の便が含まれていない。試験運行がうまくいかなかつたのか、あるいは運行が難しかったのか。週末（金土）だけでも22時最終便の運行はできなかったのか。	・新たに運行を予定している乗合バスについては、運行時間をやや早めに終了する形でスタートします。すべてのニーズに完全対応することは難しいものの、今後、町民の皆さんの利用状況や意見を踏まえながら、運行内容の見直しや改善を図っていきたいと考えています。どの時間帯や曜日にどれだけの利用ニーズがあるかを見極めることが課題となります。
○乗合バスについて ・施設へのアクセスに困難を抱える人が多く、中心部に施設やスーパーを集約することが有効と考える。高齢者の一人暮らしが多い現状で、バスを導入しているのは理解できるが、予約制は戸惑いを招く。慣れの問題ではなく、総合的な対応が必要である。	・町民の多様な意見を聞きながら進めており、今後も必要とされるサービスや施設のあり方を見極めながら、柔軟に対応を続けていく方針です。
○スクールバスについて 予約制乗り合いバスについて、登下校の保証をしていただきたい。西部地区は路線バスと同じような運行となっているが、第1～3小学校は予約制で、停まる回数が増えるほど時間もかかるため非常に不便に感じる。停車地のポイントを絞って、もう少し時間通りの登下校としてほしい。	・子どもたちの登下校の移動手段として導入している予約型乗合バスについて、町内各校で説明会を実施しました。特に、朝の時間帯の運行に関して多くの意見が寄せられ、これを受けて、朝8時台の便について、利用の有無にかかわらず利用見込者を対象に半年ごとの意向調査を行い、ポイント設定と路線の調整を行う方向で検討を進めています。

公共交通について	
意見、質問等	町からの回答／今後の対応
○スクールバスについて ・学校と連携して、部活終わりの子供達がバスの時間に間に合うようにしていただきたい。また、旭川から高校生が入ってきて、町営バスの「道草館」での乗り継ぎがうまくいっていない時間帯がある。	・バスの便数や時間帯は、旭川市や東神楽町から回ってくる既存の電気軌道バスとの接続を考慮し、「道草館」から電気軌道の便の接続は10~20分程度の余裕を持たせた時間設定としています。今回の乗合バスは旭川電気軌道へ委託しており、既存の路線バスと乗合バスの接続、管理が同一担当者により行われていることから、路線バス側の調整も含めた連携が可能で、今後も、町民の声を反映しながら、実情に合った交通サービスの充実を図っていきます。
○スクールバスについて ・今年10月からスクールバス、学童バス、予約制乗合バスが統合されると聞いているが、その理由や統合によるメリットが不明である。予約制乗合バスはルートや時間が日々変わる可能性があり、子どもが安全に乗降できるか不安がある。9月からの実証実験開始あたり、混乱や戸惑いが予想されるため、子どもと保護者が安心できる体制の整備を強く望む。	・町が導入を進めている予約型の乗合バスは、交通サービスの効率化と向上を目的としており、決してサービスを低下させるものではありません。町内ではこれまで定時運行の町営バスやデマンドタクシーなど様々な交通手段が運用されてきましたが、利用状況やコスト面での課題もある中、全体を見直した結果、現在の予約制乗合バスの導入に至りました。運行は旭川電気軌道が担い、同社は既存の路線バスも運行しているため、担当者が同一で連携がしやすく、町内外の移動がよりスマートになることが期待されています。地域の交通体系を再構築するため、交通協議会で2年間にわたり検討が重ねられてきました。新たな交通サービスは、今後数年をかけて段階的に改善を進めていく予定であり、住民の皆さんのお意見を受け止めながら、より良い移動環境を整備していく考えです。
○シェルター（バス待合）について ・乗り合いバスの停留所について、住宅地にある停留所は日除けになるような屋根等がない。さらに今後は雨や雪の影響が考えられるが、何か対策を検討しているのか。	・市街地では、定時定路線ではなく、予約に応じて運行時間と通知するバス運行方式を採用しています。利用者の長時間の待ち時間を避ける仕組みとしています。バスの乗降ポイントすべてに屋根を設置することについては、設置場所の所有などの課題がありますが、それらを把握し解決できるか検討を行い、サービスを発展させていきます。
○みまもりカーについて ①みまもりカーの旭川方面への運行は、他地域でも難しいとされていると理解している。自身がドライバーを手伝う中で、体調不良時に旭川市内の病院などへ直接行きたい場合利用できない現状がある。また、旭川市内へ買い物に行きたいが、荷物が重いため地域の方に個別に頼むしかなく、これらの点について回答いただきたい。	・みまもりカーは、地域住民が高齢者など生活の足を必要とする方々を無償で支援する目的で運行されており、一般向けの広域的な移動手段として利用することは難しいと考えます。特に旭川への移動については、旭川電気軌道による路線バスが担っており、今後は新たに導入する予約型乗合バスの運行も電気軌道に委託し、路線バスの改善や充実に向けて検討していく考えです。また、高齢者向けのハイヤー助成制度も継続して実施しており、今後も多様な移動手段の確保に向け、検討を進めています。
○ライドシェアについて ・今、乗り合いバスの計画が進んでいるが、ライドシェアを東川町で採用することについての議論があったのかお聞きしたい。	・東川町では、現在「みまもりカー」をはじめとした地域交通の仕組みを実施しています。ライドシェアについては、国の動向や他自治体の事例を踏まえ、交通協議会にて慎重に検討してきました。その結果、現時点では導入の必要ないと判断し、現在の制度を継続しています。ただし、今後の制度改正や町の状況変化に応じて、導入の可能性も視野に入れつつ、引き続き情報収集と検討を進めてまいります。
○ライドシェアについて ・東川町のような規模の地域におけるライドシェアの導入についてですが、我々の視点から見ると、このような規模ではどのように受け入れられるのかは少々不明である。町民にどのように感じられるかについては、慎重に見極める必要があると考える。	・ライドシェアは、一般住民が運転者として有償で運行に参加できる新たな交通手段であり、規制緩和により導入が可能となった仕組みです。一方で、実際の運用には法的・制度的な課題が多く、簡単には導入できないのが現実です。東川町では現在、各振興会が無償運行する「みまもりカー」によって、地域の足を支えていますが、これも無償であるからこそ成立しています。今後、民間の力も活用しながら有償運行を視野に入れた持続可能な交通体系を構築するため、ライドシェアの可能性についても慎重に検討を進めていく考えです。

公共交通について	
意見、質問等	町からの回答／今後の対応
○空港との接続について ・空港から東川町への交通手段について、空港連絡バスがなく、タクシー利用も事前予約ができないと言われた。過去には旭川市内から出発し東川に入る形でしかタクシー利用ができない、そのため空港から直接町へ来られるタクシーが増えることを望んでいる。	・旭川電気軌道による「いで湯号」が旭川駅から道草館、旭岳方面まで1日3便運行されており、空港にも立ち寄るルートとなっていますが、便数が少なく利便性が十分とは言えません。特に、町民や観光・来訪者にとっては、空港から東川町へのスマーズな移動が難しいという声が上がっています。一方、タクシーの利用にも課題があります。空港がある東神楽町と東川町では、タクシー事業社の運行区域が異なるため、柔軟な運行が難しくなっています。こうした現状を受けて、町としても強い懸念を持ち、早急な改善が必要と認識しています。町内のバス事業を担う旭川電気軌道との関係を生かし、空港と東川を直接つなぐ新たな運行ルートの可能性について、今後具体的な協議を進めていく意向です。

市街地活性化について	
意見、質問等	町からの回答／今後の対応
○宿泊施設について ・旧東川駅跡に隣接するホテル計画について、もう建つか。サッカー選手による利用は想定されるのか。	・レンガ倉庫裏手に建設予定のホテルは、民間事業者によるもので、現在内容は検討中です。セレッソ大阪の選手は「キトウシの森」のケビン（20棟）を6月中旬に約2週間貸切予定で、その間、一般の人は使えない状況になる見通しです。
○宿泊施設について ・町内に宿泊できるところが少ないと感じている。これらの計画において、民間ホテル会社から話が来ているのであれば進めていただきたい。特に中心市街地の検討はどのような状況か。	・町としては宿泊施設の建設に直接財源を充てるのは難しい状況にあるため、元警察官舎3棟を、特別交付税を活用し、民間事業者による改修を経て、ゲストハウスや移住体験用として計24室を運営しています。しかし、それでも十分ではなく、民間の民泊施設が増えてきています。市街地内や郊外でも農家の空き宅地は増えており、特に市街地の宿泊施設は不足しており、その解消に向け、現在、民間事業者による様々な構想もあり、現実的になればお知らせしたいと思います。
○道草館の機能について ・道草館は他の場所と比較して少々狭いのではないかと感じている。より大きな道の駅ができれば、東川を訪れた人々も喜ぶのではないかと考えている。駐車場も整備された広い道の駅ができれば嬉しい。	・道の駅に関して「施設が狭い」「居場所がない」といったご意見は、以前から町にも寄せられており、階段下のベンチも撤去され、バス待ちのスペースが不足していることへのご指摘を多くいただいています。こうした状況を踏まえ、駐車場の台数不足を解消するため、山田自動車跡地や道草館の裏側など複数の土地を取得し、一部では駐車場や自転車置き場の整備を実施しました。まだ砂利敷きの部分もありますが、駐車場を増やしました。また、道の駅の隣にある水色の壁の2階建て建物も町が取得済みで、この建物の1階部分をバスの待合所として整備する案を検討中です。10月1日から乗合バスが本格運行され、現在は道草館に入っているバスをその建物脇に回すことで、バス動線の集約と待機スペースの確保をします。道の駅本体の増築は現実的に難しいため、道の駅内部の混雑緩和とともに、前面の空間を人が集まるような公園的な広場として整備し、施設全体の魅力向上をめざします。
○観光周知について ・町を歩いていると携帯を持ってさまよっている人をよく見かける。話を聞くと、喫茶店を探しているが見つからないとのことである。観光客にとっては分かりづらいのかもしれない。	・観光客が町内の店舗情報を簡単に入手できるよう、観光協会などと連携してアプリの開発や情報提供体制の整備を進めていく必要があります。既に一部の仕組みは存在していますが、使いやすさや利便性の面で課題もあるため、改善が求められます。また、Googleマップなどのデジタル技術も進化しており、訪れる人々がそれらのツールを使いこなしている状況を踏まえ、進めていく必要があると考えます。

市街地活性化について	
意見、質問等	町からの回答／今後の対応
○町内導線について ・町内を歩きやすくし、自転車道が整備されれば、町全体が自転車でつながり、中心部への人の流れが活性化すると期待される。自転車の乗り捨てが可能な仕組みがあれば観光客にも便利で、遠隔地のミュージアムや施設も連携できる。	・観光協会が展開するレンタサイクル「コギコギ」は、指定されたターミナル間で乗り捨てが可能な利便性の高い仕組みで、現在は「きとろん」や道の駅、空港などにターミナルが設置されており、非常に優れた仕組みでありながら、利用の広がりには課題があります。過去には旭川市との連携も試みましたが、旭川側では1年で運用を中止するなど、現在も観光協会は試行錯誤を重ねており、こうした意見を今後の取組に反映していきたいと考えています。
○移住施策について ・東町1・2丁目の坪単価が5~10万円と高めであるため、一定の財力がある人でなければ店舗出店が難しい現状にある。町のおもしろみや活気を生むには、若い世代が気軽に挑戦できる環境づくりが必要だと考えている。	・東川町の魅力が課題となり、民間による多様な動きが進んでいる一方で、土地価格の上昇や競争の激化により、新たに挑戦するにはハードルが高くなっているという課題も出てきています。民間の投資を歓迎しつつも、それだけに任せるのではなく、地域のバランスを保ち、誰もが挑戦できる環境を整えるため、一定の関与や支援を続けていくべきと考えています。自分のやりたいことを実現するだけでなく、時に「それで良いのか」という視点を町が提示することも、バランスを保つべきとも考えています。起業化支援制度を継続し、補助金を活用したチャレンジが近年増加するなど、今後も商店の立地など、地域住民が挑戦しやすい仕組みや場所の整備に取り組んでいきます。

土地利用について	
意見、質問等	町からの回答／今後の対応
○土地の売買について ・ニセコや富良野の例を踏まえ、東川町でも土地が外部資本に買われないようにとの声が多い。「町を地域住民のために守る」こと、土地を売却する際は町が定めるガイドラインの許可が必要と聞いている。今後もこの取り組みを継続してほしい。	・東川町では、まちの秩序ある発展や環境保全に配慮しながら、多様な民間活動を受け入れる姿勢を大切にしています。ただし、民間の開発行為に対して行政が対応できる範囲には限界があることをご理解いただきたいと思います。一定規模以上の土地利用や建築行為については町の手続きにより調整が可能ですが、それ以外については制限が難しい現実があります。町としては外国人を排除するような考え方ではなく、多文化・多様性を尊重することを基本としています。その一方で、営利のみを目的とするような動きに対しては、行政だけでなく町民一人ひとりが関心を持ち、見守っていくことが重要です。住民と行政が共に目を向けていくことで、持続可能で調和のとれたまちづくりを進めていきたいと考えています。
○法整備について ・東川町へに移住理由の一つに「水」があると認識しており、東川町の大切な資源である土地、資源を守るための条例や法整備などの危機管理について町の考えを伺いたい。	・東川町は「地下水の町」として自然環境を守りながら暮らしを支えています。町では上水道整備を行わず、全戸で地下水を利用していますが、全戸の水質検査は5年に1度のサイクルで行っており、水質や水量については問題なく、良質な水が得られない地域には助成制度（おいしい水給水施設整備事業補助金）や飲料水供給施設を設けるなど、きめ細やかな対応を行っています。今後も水を守る仕組みや対策について、町民の皆さんにわかりやすく伝え、意見も反映しながら進めていきます。平成14年には「美しい東川の風景を守り育てる条例」を全国に先駆けて制定し、開発抑制や景観保全に取り組んできました。近年では太陽光パネル設置の増加を受け、景観と環境保全の両立を図るため、独自のガイドライン策定を進めています。 今後は、資源や山林の保全にも視野を広げた包括的なガイドラインを早期に策定したいと考えています。土地売買や開発についても町独自の規制を設け、行政として事前確認を徹底しています。町民の皆さんにも監視の目としてご協力いただき、気になる点はぜひ役場まで情報をお寄せください。

高齢者福祉について	
意見、質問等	町からの回答／今後の対応
○老人施設について ・老人施設のことについても伺いたい。町外の人に、東川町にはこういう老人施設があると言えるような施設をつくってほしい。	<p>・現在、町では社会福祉協議会や北工学園に委託し、高齢者福祉サービスの充実を図っています。新たに始めた事業として「そらいろ」を活用した「いきいきサロン事業」があり、高齢者が地域の子どもたちとの交流や多彩な活動を通じて、社会参加への意欲や自己効力感を高めています。また、高齢者の孤立防止や地域コミュニティの活性化を目的とした事業です。地域生活支援センター「ふれ愛の郷」では、地域支援事業の総合事業を活用した新たな通所型サービスを展開しています。この施設は、北工学園が運営する三角屋根が特徴的な建物で、下階に食堂、上階に研修室を備えた構造となっています。</p> <p>これらのサービスは、民間のデイサービスセンター（西8号）の休止を受けて、高齢者が住み慣れた地域で自立した生活を送るための補完的な支援策として立ち上げられました。現在の利用者はまもなく定員に達するほど盛況で、新たな課題が生じてきています。今後は、スタッフの補助的な役割として福祉専門学校の学生が加わり、高齢者との交流が図られることで、更なる相乗効果が発揮されることを期待しています。</p>
○高齢者支援について ・自身も高齢になり、将来的に施設利用者になる可能性がある。その視点から見ると、老人施設は数はあるが良いところが少ないと感じる。子ども向けには幼児センターや保育所増設など移住者対応の努力が目立つ一方、高齢者向けには目に見える優れた取り組みが少ない。	<p>・町では、高齢者福祉の取り組みにおいて、施設の整備だけでなくサービスの質の向上を重視しています。たとえば、「そらいろ」では、高齢者が自分らしく長生きし、健康的な暮らしを送れるような支援事業を展開しています。また、高齢者の「居場所づくり」にも注力しており、福祉施設を単なるサービス提供の場としてではなく、交流や安心感のある空間として活用できるよう、工夫を凝らしています。</p>

その他公共施設について	
意見、質問等	町からの回答／今後の対応
○町づくり・施設の維持管理について ・近年の東川町の変化に対し、町の考え方方が分かりにくい。転居した頃と町の様子が大きく変わり、道路や建物の整備によって景観や生活動線が都会のように感じられる。現在、町民の半数以上が移住者とされているが、昔からの住民の意見も聞くべきで、農地の区割りや住民の質の変化の中でも変わらない点もある。 ・博物館や遊水公園、第三小学校など既存施設の維持管理が不十分と感じられる。遊水公園の東屋に向かって続く道が整備が全くされていないと感じる。北工学園近くでのデイサービス計画があると聞いているが、建物が老朽化し費用がかかると聞いている。また、以前は美しかった道路や郷土館が近年は劣化しており、それらを放置して新しいものをつくる、住民が希望している町はそのような町ではない。	<p>・東川町は移住者の増加が続き、現在では人口の55%以上が町外出身者となっています。宅地需要は高まり、販売開始と同時に完売する状況だが、農地を宅地に転用する考えはありません。東川町の基幹産業である農業は、強い農業が保たれているからこそ美しい農村景観が維持され、素晴らしい風景が広がっている。家具産業も林業と製材業を含め、大きな産業として町民の約4割の人々が生活しているが、現状は厳しく、家具産業の振興も必要です。観光業も振興策が必要で、守るべきは守りつつ、経済を回し、町民が豊かになるためには少し攻める姿勢も必要です。</p> <p>・歴史を踏まえ、町民が誇りに思える場所を作り、織田コレクションを活用するなど、旧東川駅跡の再開発をしっかり考えるべきで、決して暮らしを壊す意図はなく、バランスを保つつつ守ることが東川らしい持続可能な町を作ることにつながり、環境や景観、遊水公園などの既存施設の維持管理についても配慮し、大切にていきたいと考えています。郷土館については、現在は週に一回しか開館していない点も問題であると考えており、4月1日から地域おこし協力隊を1人採用するなど、残すべき貴重な建物として整備したいと考えています。</p>
○文化施設の整備について ・演奏会や講演会を恒常に開催できるような、大きな建物がない。改善センターやせんとぴゅあ、講堂などの施設はあるが、中心的な施設があれば、多彩な文化活動がより充実すると考えている。	<p>・文化ホールの整備については、東川町にすでに500人規模の集客が可能な「改善センター」や「せんとぴゅあ」があり、固定席がなく多用途に活用できることが特徴です。これまでの実績からも、大規模な専用ホールを新たに整備する必要性には疑問があり、むしろ汎用性のある空間を創出することの方が、東川町のまちづくりのスタイルに適していると考えています。文化ホール整備の議論は過去から存在しており、今後も多様な意見を踏まえながら検討を継続していく必要があります。</p>

その他公共施設について

意見、質問等	町からの回答／今後の対応
○施設設備について ・「写真の町」であるということもあり、多くのカメラマンが居住している。自身が移住してからも、せんとぴゅあ、そらいろ、きとろんなどの施設が整備されたが、施設設計段階で写真展示のイメージや設備など、写真の見せ方の考慮されるべきと考える。	・「写真の町」としての東川町には多くの写真関係者が暮らしており、文化施設の在り方についても、写真を活かす視点が必要です。今後の施設整備においては、写真や文化財を効果的に活用し、魅力的に見せるための展示空間の在り方を慎重に検討していく必要があります。過去に「せんとぴゅあ」を建設した際には一部の壁が展示できない仕上げになっていた。写真を通じた発信の重要性を改めて感じた経緯もあり、写真が生き、発信できるよう取り組んでいきます。
○そらいろについて ・隈研吾氏のデザインで、照明が多く使われており明るく良かったが、照明はLEDを使用しているのか。	・LED照明を採用していますが、スマートフォンで撮影しようとギラついてうまく写らないという問題があり、こどもらんど、活動ルーム、健康づくりルーム、相談室2、廊下など一部の空間は、照明を別のタイプに変更して改善を図っています。
○チャレンジキッチンについて ・2017年に旧小学校跡に設置された「チャレンジキッチン」で、味噌やトマトジュース作りを継続して実施してきた。これまでの指導者が退任し、現在は責任者が不在であり、調理機器の使用について担当課からは「自分たちでできるなら使用可」とされているが、滅菌作業や清掃には危険を伴い不安がある。	・チャレンジキッチンの指導者については、これまで担当していた地域おこし協力隊員が3年の任期満了となり、現在は振興公社に転籍しています。新たな指導者については、協力隊員の募集を継続して行っておりますが、まだ決定には至っていません。町では、関係課と連携しながら、次の指導者が見つかるまでの体制づくりについて検討していきます。

その他について

意見、質問等	町からの回答／今後の対応
○タウンミーティング開催の在り方について ・まちづくり計画の進捗は毎年タウンミーティングで報告され、意見交換記録も残されているが、限られた時間の説明では十分に理解できない。進捗をより明確に把握できるよう、メール・広報誌・ホームページ等で資料を提供し、参加者が意見を返送できる仕組みを整備してほしい。	・「まちづくり計画2024」は前年に策定され、2025年はその2年目にあたります。現在は新たな大きなトピックはないものの、計画に基づく取組は着実に進んでいます。成果報告については、説明時間の制約から十分な説明が難しいことから、計画のローリング（見直し・更新）は2026年度に実施する方針であり、来年のタウンミーティングで詳細な報告を行う予定でいます。
○天人峡跡地整備について ・天人峡から旭岳温泉までの登山道が廃道になっており、再開は非常に困難。登山道の管理は難しいが、この道は天人峡旭岳地区の歴史的に重要な道路である。整備計画があるなら、説明してほしい。	・天人峡地域については、国や北海道、美瑛町、東川町など関係機関が連携して「魅力向上検討会議」を立ち上げ、地域全体の再整備に取り組んでいます。この会議を通じて、観光協会や関係団体とも情報を共有しながら、基本構想の策定を進めました。登山道の状況も踏まえ、旭岳との連携や周辺環境の改善、必要なアクティビティなどについても検討が進んでいます。ただし、天人峡の整備は町単独で進められるものではなく、国や環境省、北海道との調整が必要であり、予算や省庁間の調整の課題もあります。たとえば、町として事業費を出したくても、管轄の違いにより調整が難しい場合もあります。今後も国や関係機関と連携しながら、地域の魅力向上と整備に向けた取り組みを進めてまいります。

○道路整備・ゴミ袋について

・株主の森周辺道路で車の通行量が増加しており、冬季も含め通年開通しているため、大型車両とのすれ違い時に危険を感じことがある。安全確保のため退避場を設けていただきたい。東2号北7線のカーブ道路の視認性が悪いのでカーブミラーを設置いただきたい。

・ごみステーションではライスレジン製ごみ袋導入後、燃えるごみと空き缶の袋を間違えて出す人が増え、ステーション内にごみが溜まり処理困難な状況。以前のように分かりやすい袋に戻すことを求めたい。

・「株主の森」付近の退避場設置と、東3号地区におけるカーブミラーの設置については、町で検討を進めます。

・ごみ袋にライスレジン素材が導入されたことにより識別がしづらくなったという課題については、町としても問題を認識しており、現在デザインの見直しを行い、新たなごみ袋の製作に向けて準備を進めています。

その他について	
意見、質問等	町からの回答／今後の対応
○連携事業内容について ・「にしたんクリニック」との連携の進捗状況と、「日本一健康な町」について、具体的な内容を知りたい。	・今年2月に「にしたんクリニック」の西村社長と地方創生アドバイザーとしての連携を開始し、町民向け講演会も実施しました。西村社長には町を案内し、東川町の暮らしを大切にする姿勢をご理解いただいた上で連携です。健康に関心の高い西村社長ご夫妻に東川米を紹介したところ、SNS等で発信され、25万回以上再生されるなど大きな反響があり、ふるさと納税の寄付額にも好影響が見られました。町の産業PRとして家具をプレゼントし、素晴らしさを理解いただいたうえで、家具のPRを依頼する予定です。健康なまちづくりの一環として、R-bodyとの連携により高齢者の身体機能改善を目的としたプログラムも進行中です。将来的には健康寿命を伸ばし、介護給付費や医療費の抑制にもつながると期待しており、名実ともに「日本一健康な町」を目指してまいります。